
真理と俺。

KOF

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真理と俺。

【Nコード】

N0981Z

【作者名】

KOF

【あらすじ】

人にして人外の力を宿す異形たちが存在する、現代世界とはほんの少しだけ『ずれた世界』。魔術や超能力が密かに跋扈し暗躍すること以外、ほとんど変わらない世界。

そんな、関係の無い関係がある世界での、一人の少年の物語。

プロローグ

「ねえ、神様って、いるの？」

少しだけ昔、一人の少女が父親に問うた。

それは、どれだけの人間が疑問に思ったことか。その少女もまた、その多くの人間の一人だった。

しかし、父親は、何も躊躇わずに答えたのだった。

「いるさ。お父さんは、信じているから」

信じるところに、神はあらわれるんだよ。

少女の頭を撫でながら、父親は微笑んだ。

少女は、蒼白なその顔を、父親に向けて、彼と同じように微笑みながら、また、問うた。

「じゃあ、わたしのところにも、信じれば、神様はやってくるかなあ？」

やってきて、お願い事、叶えて欲しいなあ、と。笑いながら、顔を伏せた。

それは、不遜すぎる願いなのかもしれない。叶えて欲しいと思うことさえ、不遜なのかもしれない。それ以前に、叶う可能性など、零なのかもしれない。

それでも、願わずには、いれなかった。

「お父さん。神様は、わたしのこと、嫌いなのかな」

「……………」

白いベッドの上で、静かに涙を零しながら、無力な父に、そう語った。白い髪も、その涙で濡らしながら、触れれば折れてしまいそうな喉をしゃくりあげながら。

「お父さん、お父さん。わたしは、どうして、」

「神様がお前を嫌いになっても」

私は、お前のことを嫌いになつたりしない。

私が、神になつてやる。

父も、同じく涙を黒い瞳から零しながら、彼女の手を握った。

この二人には眩し過ぎるほどの日の光が差し込む白い部屋で、二人はお互い泣きあった。どちらが、どちらにというわけでもなく、どちらもが、どちらにも、泣いた。

「天の坐」

その、眩し過ぎるほどの部屋に、黒い点がぼつり。

そこからなのかもしれない。

無力な男が、狂い始めたのは。

プロローグ（後書き）

この作品は、作者の偏見によって満ち満ちています。

感想、批判、指摘、お待ちしております。

第一話：自殺予兆

二十一世紀もようやく世紀末を迎え、二十二世紀への期待が膨らむ中。様々な技術が発展し、様々なことが可能になった時代。

それでも、人が住む場所が一新されるわけでもなく、二十世紀から存在するアパートメント住宅。多機能化が図られたとはいっても、所詮はアパート。高級マンションなどと比べるとセキュリティ面でも圧倒的に負け、外面でも完璧に負けた存在だが、安価な家賃は学生が住むにはちょうどいいのだった。

その、都内某所のアパートの一室。

「自殺者が全国で急増、ねえ」

黒髪黒目の平凡な容姿をした少年、ほんだしきあり本多識織。登校直前なのか、リビング兼寝室で食パンをかじりながら、テレビ画面に映る、今話題のニュースを眺めていた。

「俺なら出来ないがね。そんな恐ろしいこと」

そう言う。バターナイフでバターを掬い取りパンに塗りつけ一口。塗り過ぎたのが、濃厚なバターの味が口いっぱいに広がる。隅に置いてあったオレンジジュースで口直しをすると、もう一度テレビに視線を移した。

そこには、自殺者の遺書が映し出されていた。それも、生々しい錆色の染みがある、それらしい封筒に入った。

その文面は短く、端的な言葉しか述べられておらず、一般人が見ればサイコパスな文書にしか見えない。むしろ、書いた本人以外は何を言わんとしていたのか分からない。

ただ一文、こう書かれているだけなのだから。

『奴が来る』

震えた文字。飛び散った錆色の血液の痕。死亡方法は恐らく、^{リストカット}手首切断。文書に飛び散った染みの模様は乱雑で、『刃物』ではないことは明らかだった。文書を書いた直後に筆記用具で掻き切ったのだろうか？

「……………自殺か。味気ない、死に方だな」

そう言うときさつさと残りの食パンを口に放り込み、オレンジジュースで流し込むと、横に置いてあったカバンを持って玄関へと駆けて行った。

「いってきます」

と、誰に言うでもなく、アパートの中へと語りかけた。もちろん、誰からの返事もあるわけも無く、ただただ声が空しく響いただけだった。

靴を履き、玄関を開けると、そこには黒髪ポニーテールの可愛い幼馴染の姿があるわけもなく、新学年早々の冷たい外気が体を引き締めた。

眼下には広大な光景が　広がっているわけも無く、アパートの三階、見渡せるのは、向かいの棟の美人ねーちゃんの下着ぐらいである。

いつも通りの光景。いつも通り際どい下着が風に揺れている中、一つだけ、異常な空間があった。

向かいの美人ねーちゃんが、ブランダの取っ手の部分に足をかけていた。ただ、尋常ではない様子で、何かに追われているような。

そして、目が合った。口が開く。か細い声で聞こえなかったが、口の動きで何を言わんとしているのかだけは分かった。

『た、たすけっ！？』

分かったが、言い終わる前に彼女は何もない虚空へと体を投げた。

識織が知るところの彼女は、夜に出勤するどこにでもありふれたただの風俗嬢だったはずだ。もちろん、基礎体力も『一般』の域を出ない彼女は、絶対に助走なしで、否、もしあったとしても、識織が住む第一棟と彼女が住む第二棟の間は飛べない。

そして、超能力者でも魔術師でもない彼女を待ち受けるのは、

重力と言う名の、当たり前前の力である。

次の瞬間、彼女は一瞬の浮遊感を味わった後、落下が始まり、獣のような声を上げてアスファルトで出来ている駐車場へと落ちて行った。

そして、不意に、人外染みた声が止んだ。近くにいれば、おそらくは聞こえたであろう果実を潰すような音は、遠く離れた識織の耳には届かなかった。

ただ、ゆつくりと向かいの駐車場を見下ろすと、そこには、真っ赤で粘着質の液体が、美人ねーちゃんを中心に不気味な魔法陣のような模様を形作っていた。

識織はその光景を何も言わずに見つめ、彼女が飛び降りてきた部屋の方に視線を向ける。

そこで、なにか紅い瞳を持った何かの存在を感じた。それは、識織に見られていると分かるや否や、一瞬でその気配を霧散させ、気配の海である街の方へと消えて行った。

何が起こっているか、あまり分かっていない識織だったが、ここは社会人になるための試練だと思い、通学鞆の中からスマートフォンを取り出し、警察を呼んだ。

「もしもし？ 警察ですか？ たった今、飛び降り自殺をした女の人がいるんですけど」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0981z/>

真理と俺。

2011年12月3日21時01分発行